
嫌な男

ありま氷炎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嫌な男

【Nコード】

N1462Y

【作者名】

ありま氷炎

【あらすじ】

鈴木ユウコは快適な駐在員生活を送る…はずだったが、支社長の館林シンノスケはユウコが嫌いなタイプで…。べたな恋愛小説です。セクハラ発言多々なので注意。

嫌な上司（前書き）

アロハシリーズの一つですが、完全に独立した話です。

嫌な上司

「鈴木は29歳かあ。じゃ、ツアーガイドは無理だな」

失礼な上司こと館林シンノスケの言葉で鈴木ユウコは事務所事務を担当することになった。

1ヶ月前、今までツアーガイドをしていた現地社員、パトリック・コーが日本に駐在することになり、本社のユウコが替わりにこちらに派遣された。

駐在員扱いということで住居などは給料と別に手配され、日本では安アパートに住んでいたユウコもここではお金持ちや外国人が住むとコンドミニアムという高級アパートに住めることになり、快適な海外駐在員生活を送っていた。

ただ問題は、支社長館林の存在だけだった。

時折社長からその話を聞いており、何度か顔も合わせたこともあった。派遣されるということで、ワイルド系な美男の元で何かロマンスがあったらどうしようとわくわくしながら、この国にやってきた。

しかし、実際館林の下で働くことになり、その発言、態度などから、彼が自分が嫌いなタイプの自信過剰男であることがわかり、失望と共に苛立ちを毎日募らせていた。

はあ。仕事変えようかしら。

それとも日本に帰る？

1ヶ月暮らしてみてこの国は過ごしやすい国であることがわかつ

た。30代で独身という女性も多く、日本よりは明らかにすごしやすい場所であった。

「Ms. Suzuki?」

そう冷たい声がかけられ、ユウコが顔を上げる。そこには完璧に化粧を終わらせ、夜の歌姫となったアイリーン・ホワンの姿があった。

「あ、Are you Off now?」

「Yes, See you tomorrow」
「See you」

歌姫か。

本当変な事務所よね。

バイトをどうだと認めるなんて。

こちらに派遣されて驚いたのだが、現地社員で会計担当、ガイドでもあるアイリーン・ホワンは夜のバイトをしていた。それはバーなどで歌うシンガーらしい。

そんな認めていいの？

ユウコはそう思ったが、社長である館林が何も言わないのだからユウコが異義を申し立てることもできず、毎日5時を過ぎると事務所にはユウコ一人になることが多かった。

館林は社内の人員節約のため、パトリックが抜けたガイドの仕事を自分で全部していた。そのため社内の仕事の負担がすべてユウコにかかるようになっていた。

おかげで毎日残業、海外ロマンスどころではなかった。

やっぱり転職かしら。

ユウコはため息をつく。パソコンの画面に目を向ける。来週から始まる修学旅行のスケジュールの最終調整がまだついていなかった。アポイントメントを入れる必要もあり、ユウコは今日もまた残業決定だと壁にかかった時計を見た。

ツルルルルル：

ふいに電話がなり、ユウコは迷ったが受話器をとる。

「Hello. This is Tan Tan Travel Agency」

「ああ、鈴木？やっぱりまだ会社にいたのか。俺今から会社に戻るけど、夕飯まだだろう？ついでに買ってくるから」

館林はユウコの答えを聞こうともせず電話口でそうまくし立てると電話を切った。

「まったく、なんでいつもこう自己中なの？」

ユウコはガチャンと電話を切り、ため息をつく。

館林のこういう相手の意見を聞かない、自己本位ところがユウコが一番嫌いとするところだった。

「げ、ご飯買ってくるって言ってたわよね。一緒に食べなきゃいけないの?!」

ユウコは先ほどの館林の言葉を思い出し、げんなりする。

早く帰っちゃおうかな。

そう思ったが、まだ終わっていないスケジュール調整、その雑用が机の上に山積みで、それは不可能であることがわかった。

しょうがないわ。

話す必要がないようにさっさとご飯食べ終わって仕事しよう。

ユウコはそう決めると、今作成中の画面上のエクセルファイルに目を向けた。

仮装パーティー

「仮装パーティー？」

「そう。明日なんだけど興味あるか？」

夕飯はチャーハンだった。お茶を入れることになり、応接室で結局ユウコは館林を食事とともに取ることになった。

必然的に話をする必要もあり、ユウコはいいやいやながら館林の話を聞いていた。

「残業続きで出会いとかないだろう？いい年なんだからやっぱり結婚したいんだろうし、いい出会いの場になると思うが？」

「！」

なんて失礼な上司なんだ。

ユウコは怒りを抑えて、無理やり笑顔を浮かべる。

「そうですね。いい歳なので、そういう出会いの場は必要かもしれないですね」

「そうそう。じゃ、決まりだな。仮装する服あるか？すっちゃんの服とかなら友達がもってるから貸すぞ」

嫌味で返した台詞を館林はニコリを笑って言い返した。

まじ、むかつく。

明らかに意図に気づいているはずなのに、そう言う館林にユウコは苛立つ。

「アイリーンもそこで歌うからちょうどいい機会だ。聞くといいぞ」
「?!」

断ろうと口を開こうとするユウコをさえぎるように館林がそう言い、結局断る機会を失った。

翌日、とりあえず友人から借りた浴衣を着て、会場のホテルに向かった。

館林の姿は一目でわかり、口さえ悪くなければ素敵な男性だと再認識する。館林は仮装パーティーというのに、燕尾服を纏った普通の格好だった。

まあ、普通がアロハシャツだから、印象はかなり違うけど。

「鈴木。なーんだ浴衣か。やっぱりすっちーの服貸せばよかったな」「いえいえ、ご迷惑かけるわけにもいけないので。ところでアイリンの歌はいつ始まるんですか？」

「8時だ。あと30分ある。ドリンクとか飲んで待ってようか」

館林はにこりと笑うと手をユウコに差し出す。ユウコは迷ったが、今日はパーティーだしと思ってその手をとった。

肌ががさがさする手だった。しかし思ったより大きく、ユウコは胸がどきどきするのがわかった。

「あ、そろそろだ」

真っ赤な液体の入ったグラスを持ち、二人は壁際に立つ。照明が消され、司会が話を始める。そしてアイリンの歌が始まった。

「すごいだろう？アイリーンは歌手を本気で目指している。オーディションにも行ってるがチャンスに恵まれてないんだ」

館林はユウコの耳元でそうささやく。耳元にかかる息に館林のつけるコロンの香りがして、ユウコは心臓が跳ね上がるのがわかった。

むかつく。

こんな嫌な上司、絶対に意識なんてしないから。

どきどきする心臓を押さえ、顔色を変えないように必死に気持ちを押しとどめ、ユウコはアイリーンの歌を聴く。

恋人のために歌っているのがその声音は切なく、ユウコはいつの間にもその歌に引き込まれていた。

歌が終わり、わっと会場が沸く。

そして、バンド演奏が始まった。アイリーンはステージから姿を消す。

「…もう終わり？」

「そう。今回のメインはお祭り騒ぎだ。アイリーンもうるさいお客の前で歌うのも嫌だろうし」

「そうですね」

会場はバンド演奏がかき消されるくらい、人々の話し声で騒がしいパーティー会場と化していた。

「鈴木。いい男みつけろよ」

館林は喧騒にかき消されないようにユウコの耳元でそうささやくと、人々が集う場所に消えていった。

どうしようか。

別に出会いつか期待してないし。

ユウコは昨日売られた喧嘩を買うように参加の意志をみせたが、アイリーンの歌にも興味があったので参加しただけだった。

帰ろうと迷っているユウコの視線の先では、着飾った女性陣と楽しげに話す館林がいる。

むかつくけど、やっぱりいい男よね。

あの性格さえなければ、一回くらい抱かれてみてもいいかも。

ふとユウコはそんな思いにとらわれ、顔を陰しくさせる。あんな男、しかも上司とそういう関係になることを考えた自分に腹が立った。

きっとアイリーンの歌のせいだわ。

あとあのコロンかな。

タバコの匂いを消すためか、酔わせるようなコロンの香りが館林からした。

普段はそんなに近づいたこともなかったし、社内ではつける必要もないと思ってたか、初めて嗅いだ香りだった。

ああ、なんか嫌な気持ち。

やっぱり帰ろう。

ユウコはぐいっと持っていたグラスを煽り、テーブルに空いたグラスを置いた。そして会場を出ようと出口に向かって歩いていると一人の男が近づいてきた。

バットマンに変装した男は背が高く、衣装に負けない体つきをしていた。

「日本人デスカ？」

姿に似合わぬやわらかい物言いにユウコは苦笑してしまう。

「Sorry, I just started learning Japanese. It is funny?」

「No, it is not funny」

英語でそういわれ、ユウコは慌ててそう答える。

浴衣を着てるから日本人だと思って話しかけてきたのに、失礼だったわ。

「I am Japanese. How about you?」

「I'm Batman」

男がそう答え、ユウコは笑った。

カウンターの席に座り、ユウコと男は飲み物を注文する。男は現地出身で、日本語を勉強中だということだった。

男は頼んでおいたウィスキーを口に含むと、かぶっていた仮面をはずす。

現れた顔は彫りの深い中東系のハンサムな顔だった。黒い瞳はきらきらと輝き、ユウコを見つめる。不敵に笑う笑顔がなんだか館林を重なり、ユウコは男に見とれるのがわかった。

結局ユウコは帰る機会を失い、男と1時間ばかりカウンターで話し込んだ。男のウィットに富んだ会話でユウコは笑い、甘いカクテルを水のように飲んだ。

久々に飲んだお酒はユウコの思考を少しずつ奪い、ユウコは男の顔に潜む下卑た笑みに気づくことができなくなっていた。

「Can you come to my home and drink again?」

そう聞かれ、ユウコはぼんやりとした意識でうなづく。

男は支払いを済ませるとユウコの腰に手を当て、足元のふらつくユ

ウコを連れて歩く。

ふわふわとした意識の中、男と共に歩いているのがわかった。
頭の中がとろけるようになり、ユウコはただ楽しかった。

男の背中に手を回し、そういえば最後に付き合った男はいつだったかと考える。

「Excuse me. She is my girlfriend
nd」

「Really?」

ふいに声をかけられ、男がぎよつとして振り向く。その英語のイントネーションから館林が日本人とわかる。

「おい、ユウコ。帰るぞ」

男に支えられているユウコを奪うように抱きかかえると館林は戸惑う男に背を向けてタクシーを拾う。

そして乱暴にユウコを後部座席に押し込むと自分もその隣に腰掛ける。

「こら、イエローキャブ。起きろ！家はどこだ。送って行ってやる
！」

「むにゃ？だれ？館林？まじでむかつく！29歳が歳なの？！あ
ほ！」

ユウコは館林を焦点の合わない瞳でじつと見るとそのまま、ぱたりと座席に倒れた。

「おい、鈴木。おい！」

館林がユウコを揺するが起きる様子はなく、むにゃむにゃとなにやら寝言を言っている。

「しょうがないな」

「Where do you go?」

「Green street please」

館林はため息を交じりにタクシードライバーにそう答えると、座席に深く座った。

最悪のシチュエーション

「気持ち悪い…」

目が覚めるとまずはその気持ち悪さに驚いた。

そして見慣れぬ部屋に自分がいるのがわかった。

「？」

体を起こすと、はらりと浴衣がはだけ、ブラが見えそうになり、ユウコは胸元を押さえる。そしてほどけた浴衣の帯を探すとベッドから立ち上がる。帯を締め直し、寝室を出て、リビングに出たところでソファに男が寝ているに気がついた。

「?!」

館林?!

ユウコは眩暈がしそうになる自分を奮い立たせ、昨日のことを思いだそうを頭に手を当てる。

確か、確か、昨日ホテルのパーティに参加して…そうそうバツマンの格好をした男と話したわ。

館林とはアイリーンの歌と一緒に聞いていた記憶が残っていた。

なんで？

どうして私、彼と同じ家にいるの？

っていうかここ、彼の家？

どうしたらそういうシチュエーションになるわけ？

だって一緒に飲んでいたのは別の男だし…

ユウコは頭痛がして、その場に座り込む。そして吐き気までこみ上げてきて、慌ててトイレを探す。

トイレらしい個室を空け、慌てて入ると一気に便器に向かって異物を吐きだす。

「気持ち悪い…」

こんなになるまで飲むなんて久々だった。

やっぱり、記憶があいまいだわ。

やっぱり、やっぱり、まさか、私、彼とやっちゃったとか？

口を蛇口の水でそそぎ、ティッシュで口を拭うと便器のノズルを押し、全てを押し流す。

これからのことを考え、ユウコは絶望的な気持ちになった。

一番避けたかったシチュエーションなのに！

あー！！私の馬鹿！

「おはよう」

トイレから出ると、ソファから体を起こした館林がにやにや笑いながらユウコを見ていた。

「じゃ、社長！すみません！どうか、昨日のことはなかったことに！」

先手必勝とばかりユウコはぺこりと頭を下げる。

覚えはないが館林と寝た確率はかなり高かった。

「…覚えてないのか？」

「はあ…」

「いやいや、昨日は本当激しかったなあ。お前淡泊と思うつつ…」
社長の言葉にユウコの動悸が激しくなり、顔を蒼白にさせていく。

まったく覚えがない。

なんで私もよりによってこいつと！

「なーんて冗談だ」

顔を完全に真っ青にさせたユウコに館林はくすつと笑う。

「なーにもって、何もなかったよ。男に連れていかれそうになった酔っ払いのお前を家に送り届けようとしたんだけど、酔いつぶれてしょうがないから家に連れてきた。帯がついてないのは、苦しそうだったから緩めたただけだ」

「……あ、そうなんですか。よかった…」

良かった…

最悪のシチュエーションは避けられた。

酔っぱらった情けない姿を見られたのがしょうがないとして、寝てなくてほんとよかった。

ユウコが安堵して胸をなでおろしたのを見て、館林は少し怒ったような顔をする。

「少しもよかったじゃないぞ。俺が止めないとお前は確実にあの男にやられていた。本日本人の女は股が緩いって思われてるから狙われるんだ」

「?!」

股が緩い!!

なんてこと言うのよ、この男はまったく！

「まあ、その調子じゃ俺は余計なお世話にしたみたいだな。俺が止めなきゃ、セフレくらいには慣れたかもしれないしな」

「せ、セフレえ！」

許せない。

黙っていたら、なんか人を馬鹿にするようなことばかり。

やっぱりこの男、大嫌いだ！

「社長。言わせていただきますけど、日本人の女とばかり言いますが、日本人の男もどうかと思いますよ。赤線地帯で遊ぶのは大概日本人の男、日本人といえば一皮むけばスケベなことしか考えてない、そう思われているの、わかってますか？」

「そうだな。確かに。俺はそれを否定しないが？」

顔色変えずさらっと言われ、ユウコは顔を真っ赤にさせる。

「：ならいいです。昨日はお世話になりました。帰ります」

自分の口撃が全く役に立たないとわかり、ユウコはいたたまれなく、くるとと館林に背を向けた。

自分を卑下されているような気持ちになり、鼻がつんとする。

まずい、このままじゃ泣いてしまう。

この人の前では絶対に弱みなんて見せたくない。

「：悪かったな。でも俺は日本人の女が海外の男に軽く扱われるのが嫌なんだ。だから悪い言い方して悪かった。ほら、お前の鞆」
玄関に向かって歩くユウコに近づき、館林は鞆をその手に握らせる。

「明日は休んでもいいぞ。明日は俺が事務所にいるから」
ユウコは館林の言葉を背中であいて、そのまま玄関から出て行った。

確かに館林の言葉は一理ある。

どうにでもなれと楽しくなってカクテルを水のように煽った。
男は明らかに自分を寝るのが目的だった。

馬鹿みたいだわ。

ユウコはコンドミニアムの外に出て、タクシーを拾うと逃げように帰路を急いだ。

上司と遭遇

翌日、ユウコはこれで休んだら女がすたると会社に出た。事務所の館林とは必要最低限のこと以外は話さず、現在抱えている仕事に集中した。

その週の月曜日以外は館林が事務所にいることはなく、ユウコは深く悩む必要もなく、1週間を過ごした。

そして日曜日、ユウコは浴衣を返すために友人に会った。

「ルミ、これありがとう!」

「役にたってよかったわ」

今年で30歳になる田中ルミは隙のないメイクを施した笑顔でそう言うのと、クリーニングを終えた浴衣を受け取る。

ルミは5年ほどのこの国に住んでいる現地採用社員だった。今年めでたく現地の人と結婚し、その左手の薬指にはさりげなくダイヤモンドを埋め込んだ銀色の指輪が輝いている。

「で、何かあった?」

「あったと言えば、あったけど…」

そう聞かれ、ユウコはルミに館林のことを話す。

「その人どれくらいカッコイイの? 見たいなあ」

館林を非難することなく、ルミはうつとりと天井を見上げる。

「ルミ、なんか頭にこないの? 私はすんごく、頭にきてるんだけど」

「まあ、確かに言い方はきついけど、的を得てるし。知らない男、しかも外国人にほいほいついて行きそうなユウコが悪かったでしょ?」

「…確かにそうだけど」

自分の味方になると思ってたルミにそう言われ、ユウコはがっくしと肩を落とす。それを見てルミはけらけらと笑った。

「まあ、イケメンだったんでしょ？それはふらふらしてもしょうがないわね。でも日本同様、へんな男いっぱいいるから気をつけた方がいいわよ。顔がよくても性格がね〜。その点うちの旦那様は、顔はそこそこのけど、性格は世界一いいからね〜」

さりげなく旦那自慢を始め、ユウコは苦笑しながら、ルミの話に小1時間ほど付き合うことになった。

「あ、まずい」

ルミとカフェで別れ家に帰ろうとした時、鞆の中で鳴る携帯電話に気がついた。取り出してみるとそれは呼び出し音ではなく、電池が切れかかっている音だった。いつも家で充電するのを忘れるため、充電器は会社に残さっぱなしだった。

明日の朝まで待つか一瞬だけ考え、ユウコは結局会社に戻ることにした。

古ぼけた建物に入り、ガタガタとゆれるエレベーターに乗る。来たばかりのころは揺れが激しいエレベーターに恐怖を感じていたが、1カ月となる今や、その音や衝撃にも慣れていた。

社員に渡されている鍵を使い、事務所の中に入る。

「鈴木？」

「社長?!」

会いたくなかった人物が事務所の中にいて、ユウコはげんなりするのがわかった。

「忘れ物か？」

「はい」

ユウコは充電器を探してさっさと帰ろうと、机に向かう。そして、机の上のパソコンが起動しているのがわかった。

画面に映るのは自分が担当している産業視察の案件だった。

「これって？」

「ああ、電話があつてな。緊急に連絡をとってほしい場所があるみたいだから、悪いと思ったが起動した。がんばってアレンジしてるな。さすが鈴木だ」

そう言つてにかつと笑う館林の顔色がいつもと違うように見えた。
「鈴木？」

ユウコは反射的に館林に近づき、その額に手を乗せる。

「社長、熱あるじゃないですか！」

「熱？　そういえば体がだるいな」

「だるいじゃないですよ。私があとはやります。帰って寝てください」

自分でそう言いながらユウコは自分の言葉が信じられなかった。

「そうか？　悪いな」

「悪くないですよ。その分、時間外手当請求しますから」

「さすがだな」

「当たり前です。さ、社長は帰ってください。緊急にしないといけないのはこの2件ですよ。私が連絡を取っておきますから、早く帰ってください。月曜日休むことになったら、ガイドをアレンジするのは大変なんですから！」

「はいはい。わかった。じゃ、ありがとう」

館林はぽんぽんとユウコの肩を叩くと手を振り、事務所を後にする。

それから2時間、ユウコは電話を2社に掛け続け、どうにかアポイントメントを作ることができた。

新しい訪問先の住所などをスケジュール表に打ち込み、保存する。そして印刷する。

「これをメールで送れば、仕事終了♪」

誰もいない事務所でそうつぶやき、プリンターから印刷した書類

を取り出す。

プルルル、プルルル、

自分の携帯電話の音ではない、着信音がした。館林の机の上を見ると、黒い少し古ぼけた型の携帯電話が置かれていた。

「あの人、忘れていったんだ。熱でぼーとしてるんだわ」

届けた方がいいかしら？

ふとユウコはそう思ったが、必要無いと思い、書類に穴を開け、ファイルに閉じる。そしてeメールを確認する。

プルルル、プルルル、

再度、館林の携帯電話が鳴る。

気にしない、気にしない。

そう自分に言い聞かせて、ユウコはお客さんに送るeメールの文章を打ち込んでいく。

「よっし、これで終わり」と

送信ボタンをクリックし、ブラウザーを閉じる。そしてパソコンの電源を切ったところで再度、館林の携帯電話が鳴った。

「しょうがないわ。届けよう」

何か緊急な用事かもしれないし、明日だったら遅いかもしれない。

ユウコは館林の携帯電話を掴み鞆の中に入れると、館林の住むコ
ンドミニアムに向かった。

お礼

呼び鈴を鳴らすと、少し時間を置いて、館林が出てきた。顔色はそうとう悪く、ユウコは心配になった。

「実家からだ。ありがとう」

ベッドに横になりながら、館林は携帯電話の着信を確認する。

結局ユウコはこのまま、携帯電話を渡して帰るだけでは心配になり、家にお邪魔して夕飯を作って帰ることにした。

先週、酔っぱらっているところを助けてもらったお礼もまだちゃんととしてなかった。これでお相子だろうとユウコは考えていた。

「悪かったな」

「別に。この間のお礼です。おかゆ作りました。自分で食べられますよね？多分、この調子じゃ明日はだめだと思うので、マギーさんか誰かに頼んでおきます」

「悪いな」

ベッドから体を起こす館林は、じっとユウコを見つめる。熱のためか、その視線が熱を帯びているようでユウコは慌てて視線を逸らす。

「じゃ、私は事務所に帰ります。この分はきっちり請求しますから」

「もちろんだ」

「じゃ、お大事に」

ユウコは鞆を掴むとベッドの館林に背を向ける。館林の何か言いたげな視線を感じたが、ユウコは振り向かず、玄関に急ぐ。

これ以上この場所にいたら、何かに囚われそうな気がして、怖

かった。

私にはやるべき仕事もあるし、頑張らないと。

明日、代わりのガイド、誰にお願いしよう。

頭によぎる熱を帯びた館林の視線を振り払うように仕事のことを考えると、ユウコは部屋を後にした。そして階下に降り、タクシーを拾った。

それからなんとかユウコは代わりのガイドをアレンジした。翌日、館林は仕事を休んだが、翌々日は元気な姿を見せた。

「鈴木、今回は本当ありがとう」

館林はぺこりと頭をさげてそう言った。

「いや、別にいいですよ。その分ちゃんと請求してますし」

ユウコは戸惑いながらそう答える。

今日はアイリーンが歌姫ツアーのため、事務所不在で部屋の中には館林とユウコ2人だけだった。

「何かお礼をするぞ。何がいい？」

「：いや、そんな。私も酔っぱらった時にお世話になってますし。ところで、ご実家の方がいいんですか？」

確か、あの時3回電話をかけてきたのは館林の実家のようなだった。日曜日は聞きそびれていたが、気にはなっていた。

「ああ、お袋が電話かけてきたんだ。まあ、結構歳だから。よく掛けてくるんだ。心配ありがとう」

やけにお礼を何度も言われ、ユウコは本当になんだか居心地が悪い気分になる。

そんなユウコの気持ちが悟ってから、館林はいつもの自信過剰な笑みを浮かべた。

「お礼は、あれにしとく。いい男を紹介する。年頃は30代後半、

顔はイケメン、性格は自己中だが、頼りがいのある男。どうだ？」

「それって…もしかして」

「そう。俺、今週末は俺がデートしてやるぞ。暇だろう？」

自信満々にそう言われ、ユウコは眩暈を覚える。

「いや、こう見えても忙しいので」

「そうか？せっかくなところ連れて行ってやろうと思ったのに。スナッチホテルの最上階のレストラン、この国の夜景が全貌でき、隣の国まで見れるんだけどな」

「スナッチホテル?!」

ユウコはそのホテル名に目を見開く。

カジノを経営するグループが保有するホテルで、その最上階は会員制になってると聞く。ユウコが逆立ちしてもいけないような場所だ。

「どうだ？行くか？」

「もちろん」

ホテル名につられ、ユウコは思わずそう答えていた。

「じゃ、今週土曜日、午後7時な。迎えにいくから」

館林にそう言われ、ユウコははっと我に返る。

しかし気付いた時にすでに時は遅しかった。

デートだ、しかも、高級レストラン。

どうしよう…

スナッチホテル、すごく魅力的な場所だった。

しかし同時に着ていく服などのことを考え、自分が浅はかな決断をしたことに気づいた。

夜のデート

そして土曜日がやってきた。

この日のために洋服を買うのは癪だったので、ルミからおしゃれなワンピースを借りた。藍色のシルク生地で裾が斜めにカットされ、花が開いたようにフリルがついていた。

ルミの家で試着して決めたのだが、いざ着て見るとなんだが館林を意識してるような自分が嫌になった。

かといって今持っている服では高級レストランに行けそうな服はない。仕方ないのでそれで行くことを決め、髪を結いあげる。

化粧も服に合わせていつもよりしっかり目にした。

いつものくせで約束の5分前には支度を終わらせてしまう。現地にきて集合時間はぴったりその時間だと言うことを学んだ。

おかげでユウコは5分ほど館林の車を待つことになった。

「へえ。間違えるもんだな」

車から顔を出した館林はにやにや笑いながらユウコを見た。

くううう。

なんか負けた感じだわ。

心の中でそう思ったが、とりあえず一生のうちで最初で最後の経験だと、笑顔を作り、館林の車に乗り込む。

車の中は煙草の匂いで充満してるかと思えばそうでもなく、ユウコはほっと胸を撫で下ろした。鼻につかない微かなラベンダーの香りがする。車の中で流れる曲はジャズだった。

くやしいけど、完璧だ。

まっすぐ前を見て、運転する館林をちらつと見て、ユウコは完全に白旗を上げた。身体にフィットする黒のジャケットを華麗に着こなし、館林は完璧にいい男だった。

「ん？俺がかっこよすぎて見とれたか？まあ、しょうがないがな」
自分を見つめるユウコの視線に気づき、館林はにやりと笑う。

むかつく。

やっぱりこの男、嫌いだ。

ユウコはぷいっと視線を窓の外に向ける。また見ていたら、俺に惚れるなよな、など言い出すに決まっている、ユウコはそう思いジャズを聴きながら、きらきらと輝く夜のネオンに目をやっていた。

車を5分ほど走らせ、目的地に到着する。

フロントで車を預け、館林は真っ赤な絨毯の上でユウコに手を差し出す。ユウコは一瞬だけ迷ったがその手を取る。

「行こうか」

館林はユウコの手を掴み、引き寄せるとそう囁き歩き出した。

ふわりと先日嗅いだコロンの香りがし、ユウコはどきりとした。

しかし、隣の館林に悟られたくないと思い、顔をこわばらせる。

「緊張してるのか？大丈夫だ。取って食ったりはしない。部下に手を出すほど困ってはいない。単に先週のお礼に過ぎないんだ」

館林は数人が乗り込んだエレベーターの中でユウコにそう囁く。

耳元にかかる声とコロンの香りで、ユウコは妙な気分になる自分を憎む。

「着いたみたいです。行きましょう」

最上階に到着し、ユウコはさっさとエレベーターを降りる。息がかかるくらいそばにいるのがつらかった。

まずいかもしれない。

ユウコは館林の行動を意識せずにいられない自分に嫌な予感を覚える。

そしてそれは時間がたつにつれて確信と変わった。

自信過剰の館林は實際上司という立場を忘れて話してみれば、鼻につくような男ではなかった。

話す内容は下卑たことから政治のことなど、さまざま引き出しを持つ男だった。

時たま、その自信過剰な発言にいらいらすることはあっても、それは事実に基づいたものでユウコは完全に館林に参ってしまった。

嫌な男、

でも、いい男だ。

二人で過ごす時間はあっという間に過ぎ、館林は腕時計を見ると手を上げて、ウェイターを呼んだ。

「鈴木、そろそろ帰る時間だ。家まで送ろう」

「…そうですね」

まだ一緒にいたい、その気持ちを押し込めてユウコはできるだけ淡白に答える。

自分の気持ちを館林に知られたくなかった。

知られて鼻で笑われるのが嫌だった。

「今日はありがとうございました」

結局館林は飲むこともなく、すっかり健全な夕食だった。車でも二人の話は弾み、ユウコは思わずこのままどこかに行きませんかと言ってしまうそうになる自分の気持ちを殺すのに苦労した。

「俺も楽しかった。鈴木って面白い女だったんだな。その調子でいい男つかまえろよ」

「またそれですか」

「だって29歳で彼氏いないはやばいだろう？」

この人は！

以前であれば張り飛ばしたく台詞も今日はなんだか館林らしいと苦笑するだけにとどまる。そんな自分の気持ちに変化にユウコは愕然としながらも、笑顔を絶やさなかった。

「じゃ、月曜日に。風邪を引かないようにしてくださいね」

車から降り、ユウコが頭を下げると、館林は一度クラクションを鳴らし、車を走らせた。

ユウコはコンドミニアムの階下で館林の車が門から完全に消えるまで見送った。

「…それって好きになったってこと？」

「うん」

部屋に戻り、化粧を落とし、シャワーを浴びて、テレビを見ていたら、なんだか急に人と話したくなった。そしてルミに電話した。

旦那と一緒にいるはずなのだが、ルミは電話に出てくれた。

「あーまずい。それはまずいと思うわ。だって、相手は上司でしょ。しかもたらし。絶望的。うまくいっても苦勞する。まずセフレどまりかもね」

「セフレ…」

「もう、あきらめなさいよ。今ならそんなにどっぷりはまってないんでしょ？ 別の人を探す、そうだ！ うちの旦那の友達を紹介するわ！ 明日、うちでバーベキューパーティーするのよ。こない？」

「いいの？」

「もちろん。かわいい格好してきてよね」
「うん、がんばってみる」

そうして、翌日の日曜日、ユウコはルミの家、市内にあるコンドミニアムに向かった。いろいろ準備や、もって行く飲み物などを買っていたら予定より1時間ほど遅れた。

しかしこの国らしく、遅れてくるもの多く、パーティーにはまだ数人しかきてなかった。

「ユウコ！」

キャミソールにホットパンツという格好をしたルミはユウコの姿を見つけると手を振る。

「ごめん。とりあえず何持ってきていいかわからなかったから。自分の好きなお酒買ってきちゃった」

「ありがとう！」

ルミはユウコからお酒の入った紙袋を受け取ると、夫のエリック、そして友人のビクターにユウコを紹介した。

ビクターはユウコより2歳年下で、かわいい顔をした華橋だった。付き合う相手というより、弟って感じかも、そういう印象を持ちながらもユウコは取り合えず、話してみた。

そしてやっぱり、館林と比べ、その幼さが分かりする自分に気がついた。

結局、気持ちは乗らないまま、ユウコは悪いと思いながらもパーティーを中座して、家に戻った。

部屋にはいり、着替えもせず、ソファに座り込む。

ああ、まずい。

最悪、あいつだけは好きになりたくないと思ってたのに。

ビクター以外にも何人か独身男性があり、ルミが気を利かせて紹介してくれた。でも誰もぴんと来る人はいなかった。

重症：

だめ、やっぱりだめ。

ソファに横になり、目を閉じる。

あのコロンの香り、自信過剰な笑みなど、昨日の晩のことを思い出し、ユウコは胸が痛くなるのがわかった。

なんで、あの男なの？

よりにもよって。

涙が出そうになったので、両手で顔を覆う。

ツルルル、ツルルル。

かすかな携帯電話の着信音が聞こえ、鞆が小刻みに揺れる。

ユウコは体を起こすと鞆から電話を取り出し、番号を確認せず出る。

「鈴木？」

「社長?!」

自分の声が素っ頓狂な声であるのがわかった。

昨日話したばかりで、あんなに嫌いだった男の声が、耳に心地よかった。

「悪いけど、事務所にきてくれないか？」

「：いいですけど、どうしたんですか？」

「訳は後で話す」

珍しく困った声でそう話し館林の様子が気になり、ユウコは事務

所に向かった。

上司の受難と私の気持ち

「社長?!」

事務所に到着し、おかしな格好で固まっている館林を見つける。

「悪い。動けないんだ」

かなり古い型のコピー機を持ち上げようとして、動けなくなったらしかった。

ユウコは困っている顔の館林を見て、思わず笑い出してしまった。
「何がおかしいんだ。笑ってないで、助ける」

だって、おかしい。

ぎっくり腰ってかなり年のいった人になるものだと思ってたら、
よりにもよって社長が!

「鈴木!そのまま笑い続けていたら給料カットするぞ」

「社長!それはありえないですよ!」

ユウコは笑うのをやめると館林を支え、椅子に座らせる。

「誰にも言うなよ。特に日本の支社の奴にはな」

「かっこいい支社長で通ってるのでイメージを崩したくないのか、椅子に座りながら館林はそう言う。ユウコはその様子がいつもの館林らしくなく、おかしくなりまた笑い出してしまった。」

「また笑う。それ以上笑ったら本当に給料カットな」

「社長。そんなことしたら、この国の労働省に行って訴えますよ!」

「できるのか?」

「できますよ!」

「じゃ、やめておく。悪かったな。呼び出して。しばらく座っていたら多分大丈夫のはずだから、帰っていいぞ。この分も休日手当請求してもいい」

「本当ですか?」

「本当だ」

「私が言ってるのは、本当に元に戻るんですかってことです。動けなかったどうするんですか？」

「…大丈夫だ。いつものことだ」

「いつも?! もう何度もやってるんですか？」

「…そうだ」

「それって、ぎっくり腰じゃないですよ。ヘルニアじゃないですか？」

「ヘルニア？」

「そう、病院行きましょう！」

「病院?!」

ユウコは嫌がる館林にそう言うが無理やり彼を病院まで送る。緊急外来扱いで、すぐに見てもらえ、急性ヘルニアで手術が必要といわれた。驚く館林を説得し、ユウコは手術の手続きを代わりに行った。

数日後手術が行われ、館林は1週間ほど自宅療養後、リハビリをしながら出勤可能と診断された。

ユウコは館林の自宅に顔を時たま見せながら、仕事をこなしていた。ツアーガイドの仕事は外注し、結構遅くまで事務所に残業し、なんとか事務所を回していた。

自宅療養から会社復帰まであと2日となったある日、来週の病院視察団体のアレンジの方法でわからないことがあり、ユウコは少し遅い時間だと思ったが、館林の家を訪れた。

呼び鈴を鳴らすと、ドアが開けられ、きれいな黒髪のスレンダーな美人が姿を見せた。

「シンのドーリョー？」

女性は片言の日本語でそう聞く。

「はい」

「Shin、Your colleague is coming.
g」

女性がそう言いながら家の中に戻る。キッチンと開けなかったドアはユウコの目の前でパタンと閉まり、ユウコは家の外で待つことになった。

今の、彼女かな？

初めて見た：

ユウコは口の中がなぜか乾くのがわかった。そして苦い何かがある。み上げてくる。

見たことなかったけど、それはいるわよね。

私は単なる部下に過ぎないんだもん。

ユウコは持ってきた書類にペンを走らせると、それ書類をドアの下から入れる。そして逃げだした。

二人が一緒にいる姿を見るのが嫌だった。

この気持ちがなにかユウコはわかっていた。

嫉妬だった。

手術の付き添い、入院中も仕事をしながら時間あれば顔を見せた。

でもそんなの、彼にとってはどうでもいいことだったかもしれない。いい。

むしろ俺に惚れやがって、馬鹿だなくらいに思われていたかもしれない。

ユウコは階下に降り、門を抜け、タクシーを拾うため、大通りに向かって歩きながら、涙が止めどもなく流れ落ちるのを止められなかった。

馬鹿な私。

本当に馬鹿だ。

タクシーを拾うと、携帯電話の着信音が聞こえた。館林からだつた。ここで出ないと変に思われると、ユウコは深呼吸すると電話に出た。

「社長？すみません。ちょっと質問があったんです。でも約束があったことを思い出して：質問はドアの下から入れた紙に書いてあります。返信はメールでいいです。あ、友達から電話がかかってきました。すみません。よろしくお願いします」

館林に何か言わせる隙を与えないように、何か悟られる隙を見せないようにユウコは機関銃のようにまくし立てると電話を切った。

絶対に私の気持ちは知られたくない。
知られたらおしまいだ。

2日後、館林は松葉杖を突きながら、出社した。

いつもの自信過剰な館林だった。

これでいつもの関係に戻る。

前みたいにかつく上司として、館林のことを思おう。

ユウコはそう決めると、必死に顔を作って過ごした。

「I'm leaving. Take care」

アイリーンがいつもの通り午後5時きっかりに会社を去る。ユウコも本当は帰りたかったが、仕事如山積みで帰れる状態ではなかった。

「社長。ひさびさの仕事で疲れたんじゃないんですか？後は私がしておくので大丈夫ですよ」

ユウコは不自然にならないように笑顔を浮かべる。

このまま館林を事務所に二人でいるのは避けたかった。一人で心を落ち着けたかった。

「鈴木、お前、俺のこと避けてる？」

「そ、そんなことないですよ。考えすぎですよ。社長」

ユウコは館林の視線から逃げるように顔を背け、そう答える。

忙しいところを見せて、これ以上の詮索をさせないように、マウスを動かし、画面上のエクセルファイルに視線を向ける。

「そうか。だったらいいけど。なあ。鈴木。またお前に世話になったな。お礼に今度……」

「お礼？お礼は休暇がいいです。ほら、社長がいない間、結構遅くまで残業してたんで疲れてるんですよ。有給取らしてください」

「そ、そうか。うん、わかった。俺はしばらく事務所では仕事できないから、ツアーガイドは外注する。だから、お前はいつでも休めるぞ」

「うれしいです。じゃあ、来週1週間休みを取りますね」

それ以上の話はしたくないと、ユウコは手元のファイルを開くと、電話をかけ始める。

館林のため息を聞こえたが、ユウコは聞こえない振りをした。

決断

ぱらり、ぱらりと会社から持って帰ってきたパンフレットをめくる。

長い休みを取れることになり、旅行に行こうと決めた。久々の旅行で嬉しいはずなのに、なんだか悲しかった。

ソファで横になる。

そして天井を見上げる。

もうだめかも。

館林と一緒にいると辛かった。

一緒にいると泣きそうになった。

ユウコは大きく息を吐くと、パンレットをテーブルの上に置く。

日本に帰ろう。

帰って彼を忘れるんだ。

有給を取るのを止め、代わりに異動願いを出そう。代わりの人が見つかるまでの我慢だ。

ユウコはそう心に決めるとパソコンを開いた。

明日、社長に渡そう。

起動したパソコンの画面に表れたワードのアイコンをクリックすると、ユウコは異動願い書を作り始めた。

「異動願い？」

翌日、一枚の紙をユウコから受け取り、館林は驚いた顔を見せた。
「どうしただ？」

「どうしてって、理由は書類に記載している通りです。やはり日本の方が過ごしやすく、私にはこの国は向いていません。すみません。出来るだけ早くお願いします」

ユウコは俯いたまま、そう口にし、頭を下げる。館林がどんな表情で自分を見ているなど、知りたくもなかった。

ただ早く彼の元から離れたかった。

「：そうか。わかった。本社に連絡する。悪かったな」

館林は乾いた声でそう言うと、書類を机の上に置き、画面のパソコンに目を向けた。それ以上何も言われることはなく、ユウコは自分の席に戻った。

胸が痛かった。

泣きたくなる自分をなんとか叱咤して、その日を過ごした。

やる事が山積みで、それが辛さを忘れさせてくれるようで助かった。

「鈴木、話がある。いいか？」

アイリーンが帰った後、しんと静まり返った事務所で館林がそう切り出した。それは断れない調子の強い口調で、ユウコは頷くしかなかった。

応接室にあるソファに館林は深く座ると、向かいに座ったユウコを見据える。そして口を開いた。

「日本に帰りたい理由は俺のせいかな？」

館林の少し茶色がかった瞳に囚われ、ユウコは胸が突かれるのがわかった。

でもこの男に自分の本当の気持ちを伝えるつもりはなかった。

ユウコは上司を見つめ返すと、息を小さく吐く。

「……そうです。私はあなたが嫌いなんです。あなたの態度、姿全てが嫌いなんです」

「そうか、そう思ってた」

館林は部下の言葉に苦笑する。

嘘つき。

私もあなたも嘘ばかり。

本当は気付いているくせに。

でも絶対にあなたに言わない。私の本当の気持ちなんて。

「ご理解いただけてよかったです。そう言うわけで異動の件、よろしくお願いします」

ユウコはソファから立ち上がると、館林に頭を下げ、背を向ける。館林の視線を感じたが、もう何も言うことはなかった。

数日後、後任の者が決まり、ユウコは2週間後、帰国することになった。

「帰るのかあ。寂しくなるうー」

「うん。ごめんね。色々ありがとう」

「また遊びにきてよね」

「うん」

その週の日曜日、ルミに帰国することを伝えるため、昼食と一緒に取ることにした。

「でも、いいの？このままで」

「うん。いいの。知られたくないから」

嫌いな男だった。

嫌な男だった。

そんな男に自分の弱みを握られなくなった。

「そう。あ、そうだ！送別会してあげるわよ。楽しくやりましょ」

「ありがとう」

そうして次の土曜日に送別会が開かれることになった。

その週、館林はユウコにいつもの態度で話しかけて来ることもなく、ユウコは仕事に集中した。引き続きができやすいように書類をまとめる。

後任は日本で仕事も一緒にしたこともある形野ミユキだった。

彼女、大丈夫かな。

かなり適当だからなあ。

引き続きに不安を思ったが、日本に戻るつもりだったので、あまり深く考えないようにした。

「こんにちは」

数日後、後任の形野ミユキが事務所にやってきた。

26歳のミユキはすらりと手足が長く、美しい長い黒髪をもつ女性だった。

どこことなく、館林の彼女に似てるような気がして、ユウコは嫌な気分になった。

「館林さん」

ミユキは館林に一目ぼれしたらしく、わざとらしく甘えた声でそう呼んだ。

その度に、ユウコは苛立ったが、必死で平常を装う。

「形野さん、これが来月の仕事の内容が入っているファイルで、あ

「つちが…」

そう説明するが、聞いている様子がなかった。

これは細かく引き続きファイルを作る必要があるかも。

頭痛を覚えながらも、自分が抜けたせいで会社に、館林に迷惑をかけるわけはいかないとユウコは気合を入れる。

「行かないのか？」

「あ、えっと、ちょっとまだ終わってないので。後で合流します」

その夕方、ミユキが強引に歓迎会を開いてくれと言うのでその夜、飲みに行くことになった。アイリーンはバイトがあると冷たく言い、5時に帰宅、ユウコは行きたくない気持ちもあったが、本当に仕事が終わってなかったのでそう言った。

「じゃ、後で来いよな。場所はホワイト・ストリートのリック・バーだから」

「わかってます」

「館林さん、行きましょう」

松葉づえの館林を支えるようにその側に立ち、ミユキは甘えた声を出す。ユウコはその様子に吐き気を覚え、視線をパソコンに戻した。

行かない。

行きたくない。

1時間ほどして仕事に一段落がつき、今日はもう帰れる状態になった。

行かないと決め、携帯電話でメールを送ろうとするとメールが届いていることに気づく。

『来い、待ってるから。館林』

そうメールが入っていて、ユウコは泣きそうになる。

でも息を吐くと断りのメールを打ち始めた。

メールを送って、携帯電話は鞆に放り込む。事務所の電気とエアコンを消して、外にでた。

「鈴木！」

事務所に鍵をかけて、歩き出す。待っていたエレベーターに乗って上がって来たのは館林だった。

「社長?! 形野さんは？」

「置いてきた」

「置いてきた?!」

「大丈夫だ。友達がいたから預けてきた」

「預けてきたって」

ユウコは思わず呆れたような声を出す。

「鈴木。お前、俺のこと好きだろう？」

「?! じよ、冗談言わないでください！」

「だったら、なんで避ける? 俺のこと嫌いなんて嘘だろう?」

全く本当に嫌な男だ。

信じられない。

「だったらどうなんですか? 笑います? 俺はいい男だから惚れられて当然だと思います?」

今さら言い逃れは無理だと思い、ユウコは館林を睨みつける。

「……よかった。俺の勘はいつもだいたい間違っていないだが、今回は自信がなかった」

珍しく自嘲した笑みを浮かべ、ユウコが驚く。

この人がこんな表情見せるなんて…

「鈴木。俺はお前が好きだ。だから、行かないでほしい。俺の側にいてくれ」

「そ、そんなの!」

戸惑うユウコをぐいっと館林が抱きしめる。

カランと松葉づえが落ち、一気に館林の体重がかかり、ユウコはその場に倒れ込む。

「おいしいシチュエーションだな」

押し倒した格好になり、館林がにやりと笑う。

「どいてください!」

ユウコは真っ赤になりながら、必死に館林から逃げようともがく。「どかない。答えろ。どうなんだ?」

至近距離でその茶色の瞳がユウコを見つめる。コロンの香りが鼻を刺激した。

「……残ります。だから、どいてください!」

真っ赤な顔をしてユウコがそう叫ぶと、館林が体を動かす。ユウコは必死になってその下から抜けだし、立ち上がった。

「:まずい。動けん。助けてくれ」

「まったく!」

ユウコは苦笑すると松葉づえを拾い、館林を抱き起こす。

「悪いな。ありがとう」

「本当、社長って見かけ倒しですよね」

「それを知ってるのお前だけだ」

「:そうですね」

くすくすと笑いながらユウコは館林の横に立つ。

「さあ、これからどうする?」

「どうするって、バーに戻らないと。だいたい、社長、彼女がいるでしょ?」

「彼女? ああ、あれは彼女じゃない。商売友達だ」

「商売?」

「そう。もしかしてそれで焼いたのか。悪かったな」

嫌な男。

凶星をさされ、ユウコはプイッと顔を背ける。

「俺は嬉しいな。そんなに俺が好きだったんだ。いつからだ？ 最初のことは明らかに俺のこと嫌いだっただろう？」

「知ってたんですか？」

「当たり前だろう。あれだけ嫌な顔されれば当然だ」

ばれてたんだ。

社会人として、大人げないなとユウコはちよつと反省する。

「ま、いいけど。今は好きだろう？」

いつもの調子でそう聞かれ、ユウコはまた顔を背ける。

「素直じゃないよな。だから俺は気にいったんだけど……」
ふいに館林はそう言った後、ユウコの肩を引き寄せる。
「ずっと抱きたいと思ってた。いいか？」

ユウコはそう囁かれ、息が止まりそうになる。

本当この人は……！

「……だめに決まってるじゃないですか！ 物事には順番が、だいたい、部下に手を出さないって言ってたのは……」

ユウコは噛みつくようにそう言い募るが、その口は館林の唇によつて塞がれる。

「エロイです。本当」

濃厚なキスをされ、ユウコは息切れ切れでそうつぶやく。

「じゃ、続きは俺の家で」

「続きって、ありません。明日は仕事ですから」

「まったく」

「だいたい、その体じゃ無理だと思いますが」

「する気だったのか？」

2人はそう言い合いながらエレベーターに乗り込む。

そうして嫌な上司と出来る部下は仲良く、建物を後にする。

「社長！そーいや形野さんは！？」

「ああ、大丈夫。今頃俺の友達と仲良くやってるはずだから」

「仲良くって！日本人女性を軽く扱われたくないって言ってたのは社長じゃないですか！」

「大丈夫。友達は女だ。彼女が色々気を使ってるはずだ」

館林はそう言いながらそっとユウコにキスをする。

今度は軽いキスでユウコは幾分ほっとした。

夜のネオンが美しく輝く街の空には、その明るさに対抗するように丸い月が輝いていた。

眠らない街に2人の姿が消えていく。

日本から遠く離れたこの地で2人はこれから新しい生活を始めるようにしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1462y/>

嫌な男

2011年11月3日23時32分発行